マイナスからの脱却
―岩上二郎―

「今日はどの本を読もうかな。」
七年生のさとるは、朝の読書タイムの本を探しに、オープンスペースにやってきました。何気なく背表紙のタイトルを目で追っていると、いくつかの本に、他のものとは違ったラベルが貼られていることに気がつきました。
「岩上…じろう？図書…？そういえば、瓜連小学校にも同じような本があったなぁ。」
「それは、岩上二郎さんと読みます。瓜連地区の出身で、茨城県知事を務めた方ですね。」
「あっ、鈴木先生。」
さとるに声をかけたのは、社会科の鈴木先生です。
「地域の偉人を知ることも大切ですね。岩上二郎さんについては、この本に詳しく載っていますよ。」
鈴木先生はそう言って、一冊の本を差し出しました。

岩上二郎は、大正二（一九一三）年十一月二十九日、瓜連村古徳（現那珂市）に父孝太郎・母とくの長男として誕生しました。昭和二十二（一九四七）年、二郎が二十三歳の時、地域の方々に応援され瓜連町長に当選しました。昭和二十六（一九五一）年に町長を辞任してアメリカ合衆国ペパーダイン大学へ留学し、地方自治や社会福祉を研究しました。昭和三十（一九五五）年四十二歳で帰国した二郎は、再び町長に復帰しました。その後、昭和三十四（一九五九）年、社会党及び茨城県興農政治連盟の支援を受けて茨城県知事選挙に出馬、当選しました。

二郎は「農工両全」を合い言葉に、次々と地方発展の政策を打ち出し、実行していったのです。

農工両全

農業と工業が両立しながら開発が進む様子を示す、岩上氏が考えたキャッチフレーズ。

「茨城の発展に貢献した人が、瓜連出身だったなんて。」

さとるは、驚いた表情をしながら言いました。

「そうですね。今の茨城の産業発展の基礎を築いたのは、岩上知事と言えるかもしれませんね。」

鈴木先生は、感心するさとるの顔を見ながら、さらに続けました。

「特に、『鹿島開発』は有名です。知事就任当時、岩上知事が感じたのは、茨城の開発の遅れでした。関東の他県と比較しても、土地活用や気候の条件で見劣りする部分は無い。しかも、首都圏に近く、太平洋に面しており、海洋交通を生かす利点もあります。茨城はまだまだ発展の可能性があったのです。

そこで目をつけたのが鹿島開発です。人工の港を造ること、一大臨海工業地帯を造ること、壮大な計画が動き出しました。でも、開発がすぐにうまくいったわけではなかったのです。波が運んでくる漂砂の問題や、民有地を買収するための資金問題がありました。他にも一筋縄では解決できない問題が山積みだったそうです。

漂砂

海岸付近の浅い海底に、波の作用によって砂や小石が堆積する現象。

それでもね、どんな困難にぶつかろうとも、岩上知事は、鹿島開発をあきらめなかったそうです。」

「どうして、そこまで鹿島にこだわったんでしょうか。」

さとるは、思わず疑問を口にしました。

「それは、きっと、臨海工業地帯を作りたいという思いだけではなく、鹿島開発をとおして、茨城の全ての人々に勇気と希望を与えたかったんじゃないかなと思います。当時、県内で開発が進んでいなかったのは鹿島地方だけではありませんでした。発展させたいと願う地域はたくさんあったのです。鹿島開発を成功させることで、発展を期待する県民全体に希望を与えたい、という強い思いがそこあったんじゃないかと思います。」

「なるほど…。先生、この本には岩上さん本人の言葉ものっています。」

鈴木先生は、さとるから本を受け取ると、さとるが指した部分に目を落としました。

鹿島港（鹿島港湾・空港整備事務所提供）

射爆撃場

現在のひたち海浜公園周辺には、昭和二十一年から昭和三十八年までアメリカ空軍の射爆撃訓練場があった。

自分の政治家としての諸政策は、幼児体験に基づく「マイナスからの脱却」が根底にあった。主な政策としてあげることができる「農地解放」「無電燈部落解消運動」「鹿島開発」「筑波研究学園都市建設」「米軍水戸射爆撃場返還運動」「田園都市構想」「霞ヶ浦用水事業計画」「重度心身障害者施設コロニーの建設」などはすべて〈「貧困からの解放」―つまり「マイナスからの脱却」〉を目指したものである。

「『マイナスからの脱却』、この精神が今でも茨城の各地で受け継がれているんですね。岩上知事は教育にも貢献した方です。清真学園の初代理事長を務めたり、今みんなが読んでいる本なども提供してくれたりしています。」

「そうですか…。この岩上図書には、そんな岩上さんのメッセージが込められているんですね。那珂市に育つ僕たちは、これからも岩上さんの思いを、大切にしていかなければならないですね。」

そう言って、さとるは再び岩上二郎図書に手を伸ばしました。

「那珂市ゆかりの先人たち」より

岩上二郎

一九一三年（大正二年）茨城県那珂市瓜連に生まれる。水戸高等学校から京都帝国大学法学部へ進み、卒業後はブリジストンに入社。その後、アメリカへ留学し、帰国後は瓜連町長を経て第二代茨城県知事となる。農耕両全をスローガンに、茨城県の産業や教育の発展に尽くした。市内の小中学校にある岩上文庫は岩上氏の寄贈による文庫である。